

# 蝶との出会い

このエッセイは、2008年8月24日(日)、福井放送のラジオ放送講座「いきいき長寿セミナー」で放送された内容の再録です。話しかける対象は50歳以上で、主に60歳代から80歳代の男女ということでしたが、講座生以外にも放送は多くの方が聞いておられるということなので一般向けの内容になっています。

蝶の話をする場合、写真があると説明し易いのですが、ラジオ放送ではそれも出来なかったため、話の中で、「何だろう」と思われるものについてはカラー写真を添付してもう一度まとめ直してみました。

みなさん、おはようございます。暑い日が続きますが、お元気でお過ごしでしょうか。この暑さは昆虫たちにとっても同じで、あまり暑いと彼らも人間と同じように木陰で休んでいます。

今日は、私の子供の頃からの趣味である「蝶の話」をしてみたいと思います。

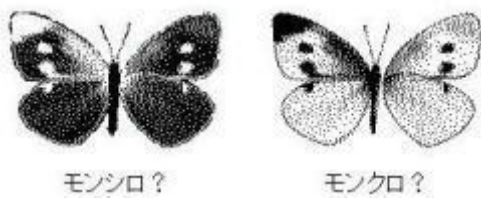


写真1. モンシロチョウ

蝶にあまり興味のない人でも、モンシロチョウはご存知ですね。でも、「モンシロチョウって名前、何か変だなあ」と思った人はかなり注意のある人です。モンシロチョウの「紋」は「黒」なのに、「紋白」というのはおかしいですね。モンクロシロチョウならまだ判るのですが、なぜモンシ

ロチョウなのでしょう(写真1.)。

勿論、愛称ではなく、図鑑にも、辞書にもちゃんと「モンシロチョウ」(英名は、Small White または Small Cabbage)と書かれています。

実は、明治初期に学者がつけた正式な「和名」は、「モンクロシロチョウ」でした。ところが、このチョウを日本で最初の「国定教科書」に載せることになったとき、「名前が長すぎて、子供達には覚えにくいのではないか」という意見が出て、省略して「モンシロチョウ」に変えてしまったというのです。

どうも日本では、昔から、こと子供の教育に関しては子供達が判り易いように先回りをして、前もって噛み砕いてやる習慣があるようですね。今の、学習指導要領のように、「中学校で覚える英単語はこれだけ」と区切ってしまうのは「記憶の蓄積」という面でも大いに疑問があります。というのも、子供が耳にする大人たちの会話には、単語の種類制限など無いからです。だからこそ、子供達の母国語の理解は深く、また豊かになるわけです。



写真2. コムラサキ

もう、40年くらい前の話になりますが、私がまだ企業に勤めていた頃に目撃した、東京駅構内にある一本の「柳の木」にこだわる「コムラサキ」（写真2. 小紫：粹な名前ですね）の話です。

7月も半ばのある日、会議も珍しく早く終わり、午後の五時頃東京駅に着き、そのままホームに出てみました。新幹線のホームから7~80m程離れたところに柳の木が一本あるのに気がつきました。周りで木といえば、そこだけでしたから鮮明に覚えています。

「へえ、こんなところに柳の木が」と思っていると、何かが動く気配がします。何だろうと目をこらしてよく見ると、そこに蝶が1頭（一匹）木の周りを飛び回っているではありませんか。遠目にも、それが「コムラサキ」であることが、すぐ分かりました。

この蝶が、何回も旋回して産卵を繰り返している様子から、「そうか、ここで卵を産むのか」と思わず同情してしまいました。というのも、駅の周辺には緑が全くなく、そこは完全な「緑の孤島」になっていたからです。

タテハチョウ（立翅蝶）類は飛翔力がありますから、可成り遠くまで足を伸ばすことが出来ますが、それにしても、レールだらけの、都心よりも気温が2~3℃高そうな構内で、よりによって1本しかない柳の木が彼女の子孫を残す場所であったということに驚きました。

近くの緑といえば皇居の緑くらいです。今年の5月4日、「緑の日」に、昨年に引き続き皇居吹上御苑で自然観察会が開催されました。吹上御苑の広さは敦賀市にある中池見湿地と同じ25ヘクタール（甲子園球場が6つすっぽり入る広さ）ですが、テレビで見る限り「私も行ってみたいな」と思うほど昆虫類が豊富だとは思われない風景でした。

皇居自身も孤立環境ですし、植えられている木も外から持ってきた木で、人工林で、しかも江戸時代から400年も孤立していることを考えれば、昆虫の多様性など望むべくもありません。

その後、柳の木はどうなったのか。「コムラサキ」の子孫は続いているだろうかなどと、コムラサキを見るたびに、なつかしく思い出します。

かって、関西に住んでいた頃、ルリタテハ（瑠璃立翅：瑠璃色をしたタテハ蝶）を庭に呼ぶために「ホトギス」を植えたことがあります。この花の模

様が、ホトトギスの胸毛の紋様にそっくりなのでその名を借りてつけたもの  
と言われてい

ます(写真

3.)。

さて、予想  
していた通り、  
ルリタテハが  
やってきて卵  
を産み、順調  
に卵から孵っ  
た後、幼虫も  
すくすくと育



写真3. ホトトギス(左)とルリタテハ(右)

っていました。これで、成虫になるところが見られそうだなと期待に胸膨らま  
せていました。

ある日のこと、幼虫は蛹になったばかりでしたが、様子が変わります。ピンク  
体を動かしているのです。何だろうと近づいてよく見ると、ナメクジが覆いか  
ぶさるようにして逃げることが出来ないさなぎの体液を吸っているではありません  
か。思わず払い落とそうしましたが、心を鬼にしてそのままにしておきま  
した。

ルリタテハを呼ぼうとホトトギスを植えたのは私でした。ホトトギスにルリタ  
テハが卵を産むのは、ごく自然ですし、ナメクジが食事にありつけたのも自然  
です。またしても、一番いけないのは人間でした。人間の都合で自然を変えて  
はいけないのです。そう思いながら人間は自然をどんどん変えていきます。環  
境保護の出発の原点はこんなところにあるのかも知れません。

私達は虫たちが他の虫に食べられているのを見つけると、つい「助けてやろう」  
と思いがちですが、人の目の届かないところではもっと様々な出来事が起こっ  
ているのです。

自然界では人間の「かわいそう」という「感情移入」や「危ないところを助け  
てやった」という「自己満足」は排除して、自然の成り行きに任せるとい  
う「冷徹な心」が必要です。



写真4. イカリモンガ

さて、「蝶」や「蛾」は、現在世界中に20万種いるといわれていますが、そのうちの9割は「蛾」です。よく、「蝶と蛾はどうやって区別するの?」と聞かれることがありますが、区別する点をいくつか挙げてみると、

1. 「蛾」は、幼虫から繭になるが、「蝶」は蛹になる。
2. 「蛾」は止まったとき、翅を外側に広げたままだが、「蝶」は背中の上でたたむ。
3. 「蝶」は触角の先が棍棒状だが、「蛾」は櫛状、または先がとがっている。
4. 「蝶」は綺麗だが、蛾は地味である。
5. 両者とも変温動物であるため、飛ぶためには一定の温度に保つ必要がある。そのため「蛾」は夜活動する為体温を保つ必要があり、厚い鱗粉を発達させており、「蝶」は昼間太陽の下で活動する為色彩は明るく鱗粉が薄くなっている。などで「蝶」と「蛾」を区別すればよいといわれていますが、例外も多く、一言では言い尽くせないところがあります。

蝶や蛾が含まれる「鱗翅目」を分類学的に分けると、小さい蛾の仲間の「小蛾類」と大きい蛾の仲間の「大蛾類」の二つになります。「蝶」は、後者の「大蛾類」に含まれています。そして、原始的と考えられているものを下から順に並べると、「蛾の一部」、「蝶」、そして残りの「蛾」というようになります。つまり、「蝶」というのは、「蛾」の中に含まれる仲間で、「蛾」の上位に位置する高等な仲間ではありません。「蝶」は「蛾」の一部であるといっても過言ではないし、「蝶」の大部分は「蛾」であるといっても良いのかも知れません。

私が子供の頃、「蝶」と間違えた「イカリモンガ」(写真4. 礎の斑紋のある蛾の意味)のように日中、花を訪れ蜜を吸い、止まった時は背中で翅をたたむなど「蝶」そっくりの「蛾」もいます。

このように、昼間花を訪れる「蛾」はいますが、夜活動する「蝶」はいません。つまり、「蝶」は昼間しか飛べない「蛾」なのです。

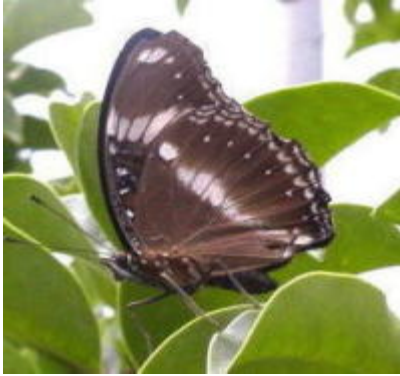


写真5. リュウキュウムラサキ

我が家の庭のブッドレア(蝶がよく来る花なので、バタフライブッシュとも呼ばれています)は花期が7月から10月で、次から次へと花を咲かせてくれます。7月も中頃になると、蝶たちが常時5~6頭ほど群がっています。蝶の好きな人であれば、庭に一株植えておくと5ヶ月くらいは楽しめます。

2004年7月のある日のこと、庭で大型の見慣れない黒っぽいタテハチョウらしきものがブッドレアの周りを何回も巡回しているのを見かけました。

「なんだろう」と急いでカメラを持ち出しました。

暫らくすると、庭のモチノキに止まりました。慌てて写真を撮るうちに、どこかに飛んでいってしまいました。その間約一分程度、結局撮影できたのは3枚だけで写り具合も悪そうです。

さっそくパソコンに取り込んで表示してみると、若干翅が痛んではいますが、図鑑で確認すると、思った通り「リュウキュウムラサキ」(写真5. 琉球紫)でした。この蝶は、南方系で奄美以南に多く、八重山では秋に多いといわれていますが、その八重山でさえ土着しているかどうかは疑問視されています。食草が「サツマイモ」や「ヒルガオ」ですから本土でも生き延びることができるかも知れません。

このような蝶を「迷蝶」と呼びますが、「迷蝶」といわれるものには、季節風や熱帯性低気圧などに乗って日本まで運ばれてくるものも多いようです。日本に飛来した個体の子孫は運がいいと、2~3回発生するそうです。何れにしてもこんな珍しい蝶が敦賀で見られるとは驚きました。

ここ2、3日涼しい日が続きましたから、はるか八重山群島あたりから来たとすれば、さぞかし寒かったのではないのでしょうか。翅を見ると雌のようですが、1頭のみだとすると、可哀相な気がします。リュウキュウムラサキの迷蝶としての記録の最北は青森県で、南に下がるにしたがって記録も多くなるようです。

それにしても50年近く蝶を追いかけていますが、「迷蝶」といわれるものに出会ったのはこれが初めてで、まさに感動の一瞬でした。

夏も終わりに近くなると、「ウラナミシジミ」(写真6. 裏波小灰)が、ここ敦賀市にもやってきます。「ウラナミシジミは」、暖かい「房総半島南部」、  
「伊豆半島南部」、「紀伊半島南部」、「四国南部」、「九州南部」などで冬

を越し、春になると日本列島を北上します。秋には、北海道に渡ることもありますが、冬になると暖地以外の地では死んでしまい、翌年再び暖かい南の地から北上を開始します。つまり、毎年同じ悲劇を繰り返しているわけです。それにしても、「ウラナミシジミ」は、死滅することが判っている北上を何故毎年繰り返すのでしょうか。

「ナガサキアゲハ」（尾状突起がありません）は、北上することで有名ですが、北上について、ある専門家の話では、「過去の温度変化を調べることにより、蝶の北上は温暖化の影響であるということが証明された」とありましたが、データを駆使して結論を出す場合は、その取り扱いに十分注意することが必要です。というのも、「北上が地球温暖化の影響だけなのかどうか」の検証がなされないまま結論を出しているからです。



写真6. ウラナミシジミ

「ウラナミシジミ」の北上の問題などは、地球温暖化では説明しきれないところがあります。「ウラナミシジミの例はまた別の理由によるもので、これはまたの機会に」ということになると、今度は、「ナガサキアゲハ」の北上の理由が、地球温暖化というのも怪しくなってきます。

科学の基点は「仮説」にあります。自然の現象を前に「何故」と問われたときに、「これを原因とすれば説明できる」として置く「仮説」です。その仮説を「観察」や「実験」あるいは「同時進行している気候」などによって確かめることにあるわけですから、この場合、「蝶の北上は地球温暖化による」という仮説から、「だから蝶たちは北上する」という予測を引き出していますから、手法としては間違っていないですが、「この説明は正しい」ということを言うためには、このような予測を幾つか試みて、その予測が全部当たっていなければなりません。すなわち、「仮説に一つでも例外があれば、その仮説は成り立たない」ということです。

仮説の提案は、最も人間的な部分であるだけに、この問題に関しては、もっと多くの仮説が提案されて、議論されてもいいように思います。

どんなに美しく論理的で整合性がある理論であっても、それが現実に合っていないければ、何の役にも立ちません。結果の明快さは、方法の正しさを保証するわけではないのです。

1998年の年末、何気なく覗いた京都の本屋で、「まさか」と思った文庫本のコーナーに『アラマタ図像館「花蝶」：小学館文庫（写真7.）とあるのをみつけ

ました。「何だろう」と手に取って見て驚きました。学生時代に国会図書館で見た、メーリアンの「スリナム産昆虫の変態」など、18世紀蝶類図鑑の3大傑作が文庫本に収められているのを見つけたからです。しかも770円という格安の値段で手に入れることが出来たのですから、これはもう幸運という他ありません。

メーリアンは、ヨーロッパ版「虫めずる姫君」（日本では「堤中納言物語」の中に、「虫愛ずる姫君」という按察使（アゼチ）大納言の娘の話が出てきます）で、すでに、30歳で「ヨーロッパ産鱗翅類」を刊行しています。スリナム（南米大陸・ブラジルの北に隣接する小さな国）では、蝶の幼虫を飼育して羽化させ、その変態の様子を食草と共に美しく描写した最初の画家といわれています。「スリナム産昆虫の変態」の特徴は、卵から幼虫、蛹、成虫と、その成長段階を一つの図の中に表現していることです。そして、これが多くの点で、博物学図鑑のスタイルを決定的に変えたといわれています。



写真7. アラムタ図像館「花蝶」

「スリナム産昆虫の変態」はファーブルの「昆虫記」が出版される150年も前の話ですから、その観察の鋭さは驚異的でさえあります。

その原画は高額で売れたそうですが、当時、蝶の成虫は自然発生すると考えられており、卵→幼虫→蛹→成虫という「変態」を描いた彼女は魔女呼ばわりされたそうです。

さて、フランスの化学者のルイ・パスツールは「幸運は準備の出来た精神に訪れる」(Chance favors the prepared minds.)という有名な言葉を残しています。この言葉は、科学者や研究者の間ではよく知られている言葉ですが、いつも求めるものがあって、アンテナを張っていれば、求めるものは私が手にした本のように、自然に向こうからやってくるものですね。

私が蝶の「採集」を始めたのは、小学校の4年生の頃からです。子供の頃から腰弁（腰に弁当）で野山を駆け回っていました。今思うと、自然の中で様々なことを体験したことが、私の「野生の勘」を育ててくれたように思います。

私はよく思うのですが、「自然の中で何かに熱中することが出来る子供」は、大丈夫だと思っています。多少、勉強が出来なくても、社会に出たらきっとやっていけます。というのも、「自分の才能を活かすとは、実は、物事に熱中す

ること」にあるからです。



写真8. 私が愛用するキャノンのバリアングル

蝶の採集をやめて、写真撮影で接写を始めたのはカメラに「蛇腹」を付けてからですが、その重さは、山に持って行くと肩に食い込んで「カメラを担いでいる」という感じで大変なものでした。今のデジカメ（写真8.）は、腰の袋やリュックに入れておけばその存在さえ忘れてしまう位の重さです。

よく、「ビデオカメラさえあれば、デジカメは不要だよ」という人がいますが、写真は、「デジタル動画」の単なる一コマではあり

ません。動画映像では、あらゆる時間の断片が均質に蓄えられているため、逆に決定的瞬間が消滅しています。つまり、全ての瞬間はその前後の退屈な連続の中に埋没してしまっています。写真が担ってきた「決定的瞬間」の記録は、今でも、「デジタル動画」なんかに負けてはいないと思っています。

蝶の写真を自分のホームページに掲載しても、何かもの足りません。理由は簡単で、発展性のない自己完結型の趣味の先には何も見えないからです。

環境省は、全国に1000箇所程度の調査地を設置し、生物多様性を適切に保全していくために、生物の棲息・生育状況を100年間、長期的にモニタリングしようという事業を行っています。この事業は「モニタリング1000」と呼ばれていますが、この話が出てきた時に、私が真っ先に飛びついたのは「趣味」の先に「環境問題」という大きな目標が見えてきたからです。

身近な生き物の様子から、環境の変化を読み取る方法は沢山あります。「蝶」も、私たちにとっては身近な生物ですが、ここから「地球温暖化の問題」にまで考えをめぐらすことが出来る生き物の仲間です。100年間といえばほぼ3世代（私から見て、孫の代まで）にわたる長期間の調査ですから、私には物理的に無理ですが、体が続く限り、続けてみようと考えています。

環境省のお手伝いを始めてもう4年目になります。毎年4月になって「蝶の調査」を開始しないと「自分が生きていくということ」が「更新」されたような気がしないから不思議です。



さて、蝶の撮影にはデジカメを用いていますが、最近の技術の進歩は著しく、1年もするとカメラ本体、記憶媒体、電池などが大きく変わり、次から次へと高性能の新機種が出てきます。自然観察指導員は自然観察では「虫眼鏡」（ルーペ）を使うことを勧めますが、デジカメは「虫眼鏡」であると同時に記録の出来る「メモ帳」でもあるのです。

デジカメの拡大写真は肉眼では見えない細部まで見ることができ、このことから得られる「知見」は私たちに「新しい視点」さえ与えてくれます。しかも時系列（時間の順に）でデータが入っていますから「まとめ」も楽だというわけです。



今現在使っている手持ちのデジカメの主な仕様の話はこの講座では出てきませんが、参考までに、主な仕様を記しておきます。主として使用した期間は2008年6月13日～2009年3月31日です。

有効画素数	約 600 万画素
レンズ	6(W)-72(T)mm (35mmフィルム換算 36(W)-432(T)mm) F2.8-F5.7(T) 432/36=12 倍
液晶モニター	2.0 型TFTカラー 約 11.5 万画素 バリアングルタイプ
撮影距離	通常撮影: 50cm～∞(W)/90m～∞(T) マクロ撮影: 10～50cm(W) スーパーマクロ撮影: 0～10cm(Wのみ)
手ブレ補正	レンズシフト式
その他	デジカメが持っている機能は殆ど全て備えています。

なお、2009年4月以降はこのカメラを使用しています。



写真9. 自然観察指導員の腕章

いま、子供達の「理科離れ」が云々されていますが、もっと憂慮すべきことは「自然離れ」です。福井県のある中学校では、自然科学からの視点を加味して、ふるさと敦賀の自然を通して自然に親しみ、自然を愛する心を育む取

り組みを実施しています。これが「中池見の自然を楽しもう」という「講座」です。この「講座」には「自然観察指導員」や「ナチュラルリスト」など多くの方々の協力をいただいております。

自然観察に少しでも興味をお持ちの方は、日本自然保護協会が主催する「自然観察指導員」（写真9. 指導員の方はこの腕章をつけています）の資格を取られてはいかがでしょうか。講師や聴講生には70歳に近い人も多く、大学生たちの若い輪に飛び込んで、自然観察に取り組むのも楽しいものです。三日間も頑張れば無事資格を取ることが出来ます。実は、私も昨年資格を取ったばかりです。皆さんも、是非、チャレンジしてみてはいかがでしょうか。

皆さん、人生の軸足を少しずつ趣味に移してみませんか。同じ人生であっても、畑違いの経験を積み重ねることで、周りの景色が大きく変わってきます。「デジカメ」を片手に、「自然」を求めて、「外に」飛び出してみませんか？

2008年8月24日

---